



特別  
A12  
5127  
2



等本

幣本

此卷の末に「して名に於て源氏の君  
十六歳の夏に於ては、是の序を以  
てあきらむ」とし、初めは「あきらむ」とあり、  
「あきらむ」と云ふ名は一部に意を相  
違はし、其のハハい物に依り申す、  
り、そののり、思ふ、又昔より、  
そと、西にありて、は、り、  
相違、朱、在、冷、泉、院、と、延、長、兼、  
平、之、磨、の、山、門、に、る、を、源、氏、と、西、  
へ、ん、ち、長、り、は、と、云、ふ、の、と、云、ふ、西

くしゆはりし所なる事まほしき  
ゆりや又号の治標をも一巻の巻と  
ししと一部しとよむん名なりいゆ  
しりし上中下のくしゆの治標  
かま号の中はゆりしとすりしと  
莊みつ爰は明蝶しりしと又明  
蝶標しりしとすりしとすりしと  
あしゆしとすりしとすりしと  
りありん乃しとすりしとすりしと  
とめしとすりしとすりしと  
まじしとすりしとすりしと

とすりしとすりしとすりしと  
くすりしとすりしとすりしと  
光原伏の名のしりしとすりしと  
ゆりしとすりしとすりしと

世多説のしりしとすりしと  
のしりしとすりしとすりしと  
乃めてしりしとすりしと  
とすりしとすりしとすりしと  
名もしりしとすりしとすりしと  
けてしりしとすりしとすりしと  
名のしりしとすりしとすりしと

うまおかし

一説は名の見ゆしうらうらひなま  
と建始とあると好女の名のことと  
うらうらひけりてうらうらむお返し  
るやひるほほとていふこといふき  
りしお前さくゆらり

このひさつうくうくはと 源氏の  
君の好女ハ在中将すのありまひ  
はうりてしうま美とてうく下の  
すまはうりうらうらむはらうら  
まうりうらうら

のいんやうしやあゆの源氏り  
うまのあゆしはあゆはあゆ  
やあゆのうらうらあゆやう  
ぬらうらり

うらうらあゆえうらあゆ  
る歌うらうらうらあゆ人  
のけせのあゆえあゆうらあゆ  
とて鬼りうらうらあゆ  
あゆあゆの類り

うらあゆいん 中しうらうらあゆ  
あゆり

あらしあひらくまはしめしんせ

友室の頼り

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

花 馬頭うしろふりしつしつとよもあぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

源氏の侍えらり茶のよのすい  
あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ  
あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ  
あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

あまのしとあまをくしてあらしよさゆぬ

末より馬帽子と用又冠形とすな

おのりせあり

むせりしもあしとすし、 しひのきと

きぬすやうり

うのゆしきくろくゆかひ うのや

うのやうしうぬくう流あまこま

名優うしんういふまをハすまはり

うけハ火の氣ま

女あく見とてまゆゆあり

二候あり一ツは女りなりしてなり

一は女りなりて見やとて行ハ死て

あ方れ在しけくらんは 馬頭相と

とのあやけし 此所野あり

むらりあめの中とまゆりうらあし

まゆゆあし 花 ち下れ改てはち改官して

通よりあし一甲し新柄の替りあり

りしてまふれつと通てつこころとむ

ゆりもゆりうらあし改まるるまふ

見ハちとよたはひと

し合厚徳以遇其下 下懐忠信以事

其上とて史記よ

あまのあまのうらあしとてあま

花  
ち下ハ唐とてともを法人カと合て  
やハし且ハ中しくやす此より世を以  
家のしんせりハある一一人のまゝとい  
り且ともゆひの言なくしてち事か  
えらり此ハまハまのまのまとい  
を

欲治其國者先齊其家欲齊其家  
者先脩其身欲脩其身者先正其心  
とあるなり （何） ちふとてとまハハ  
りくすれとあまのいまのあまのま  
はま （何） ちふとてハまありと四の

とすれと又くありとけり世中の  
はまのあまのまのまはけりまのま  
はまのまのまのまハ縦横は事の  
後ハまのまのま

はまのまのまのまのまのまのま  
はまのまのまのまのまのまのま  
のまのまのまのまのまのまのま  
はまのまのまのまのまのまのま  
はまのまのまのまのまのまのま  
はまのまのまのまのまのまのま  
はまのまのまのまのまのまのま  
はまのまのまのまのまのまのま



らん 君は朋友の中にてお印のこゝろ  
つゝあり

あせくちよおのこゝろ 何ぞかひら

きこりありとよおぬはるぬく世り

世りありとよおぬはるぬく世り

又新のめいよんこゝろ印ていぬら

いひやちやこゝろありぬらぬら

一服なり  
あしあり 言はさぬのほろありと

兼侍息ありぬら

又かやこゝろ見せりぬらぬら

りよりのあんとせやりぬらぬら

光君のそりこゝろこのらぬらぬら

あしあり

うき事ありぬらぬらぬら

のらぬらぬらぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら

ゆいめあり ぬらぬらぬらぬらぬら

とよこゝろぬらぬらぬらぬらぬら

ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬら

後よふ人思のやむぬらぬらぬら

又云りあきりてのうらまへを  
そり細れ

むらあきり ひとくやういふうらまへ

永字りり一向くを書きり 永

まじりといふらり

之位乃らめ 一 之の位とまむ

りや或本ゆがさるの位と有

三之位の子り又衣ハ位お

ハ之位と送りりり

女御とさし かまうか人の位お

も程あはれゆがら

と記と記さくしあきり

りりあきりあきりハ其い

らりりあきりあきりハ其い

ふもあきりあきりあきり

まじりハあきりあきり

あきりあきり

あきり 何 無人 一 景記

あきの女房 一 殿上の女房

あきり 何 あきりあきり

あきりあきりあきり

あきり

海より花らて 袖はひききしぬの

うらりり

まじりぬき房流ぬのしきとつら

ほくこのらりり又ゆけい命ぬとつ

とまきりりり

野ふめいきとれ風を

ぬしきりりあふん

とまむむむ 一孫 将の字りりし

秋風乃やとまむむむむむむ

とぬの字れとらりりや又とらりり

とありまきんとりりりりりりり

とまむむむのむむむむむむむ

ゆかりりりり

ゆかりりりりりりりりりりり

ゆかりりりりりりりりりりり

ゆかりりりりりりりりりりり

ゆかりりりりりりりりりりり

ゆかりりりり

ゆけい乃命ぬ 花 靴履と書てゆけい

ゆかりりりりりりりりりりり

ゆかりりりりりりりりりりり

ゆかりりりりりりりりりりり

外織お着をぬ中鴈とじしハ命ぬし  
早せり<sup>おしん</sup>後<sup>おしん</sup>下<sup>おしん</sup>のじしありを  
しある下鴈のふとりハ賀茂糸よ<sup>合め</sup>  
使<sup>おしん</sup>人使とてあがり  
ゆい<sup>おしん</sup>の命婦ハ喜徳の依敷を傳の依敷  
やいよやうなる事なり

そぬて糸を出のまは葉を 三のりえ  
や見のまひハは後おしりけり まらむ  
の園のふりハささるは長よいらさ  
まさるりたり此方のまらハやまら  
しりハ後まらぬらぬりしり

このゆをひのひをぬハ又や見の  
はし<sup>おしん</sup>もやりのぬまは後おしりけり  
しりおし<sup>おしん</sup>とちし<sup>おしん</sup>らああり

ゆ<sup>おしん</sup>つて 後若り<sup>おしん</sup>假名書<sup>おしん</sup>  
ま<sup>おしん</sup>くのし

門引おし<sup>おしん</sup>りけ<sup>おしん</sup>のあなれあり  
あ<sup>おしん</sup>ら<sup>おしん</sup>ひ<sup>おしん</sup>し<sup>おしん</sup>ひ<sup>おしん</sup>く<sup>おしん</sup>ま<sup>おしん</sup>ら<sup>おしん</sup>お<sup>おしん</sup>葉<sup>おしん</sup>ま<sup>おしん</sup>を  
め<sup>おしん</sup>し<sup>おしん</sup>る<sup>おしん</sup>者<sup>おしん</sup>ハ又<sup>おしん</sup>り<sup>おしん</sup>けり  
ま<sup>おしん</sup>お<sup>おしん</sup>れ<sup>おしん</sup>引<sup>おしん</sup>り<sup>おしん</sup>ハ車<sup>おしん</sup>の<sup>おしん</sup>く  
野<sup>おしん</sup>ハい<sup>おしん</sup>と<sup>おしん</sup>あ<sup>おしん</sup>ま<sup>おしん</sup>ら<sup>おしん</sup>く<sup>おしん</sup>して  
ら<sup>おしん</sup>ら<sup>おしん</sup>ぬ<sup>おしん</sup>り<sup>おしん</sup>し<sup>おしん</sup>る<sup>おしん</sup>の<sup>おしん</sup>り<sup>おしん</sup>て

このあまをきりうらむすわとりのこゝろ  
すわとりのやうに

やうなれにせとらふん 同人をたれ者  
りまをしくるまを八まき津よりせさハ

死乃り守り  
くのまをしくるまを八まき津よりせさハ

ん飛り

内約のまけ 命婦よりまけりぬ

使せし人より内約のまけに  
りぐりしをまける

まけりまけりしり 是よりハ物を

の歩ししなはし

りくハすり 是よりハ物書は歩む  
りまけりまけりまけりまけり

之をまけりまけりまけりまけり

まけりまけりまけりまけり

野ま宮様よりまけりまけりまけり  
りまけりまけりまけりまけり

御事なり

松乃ゆりまけり いうまけりまけり

まけりまけりまけりまけり

まけり

ちしきしひるひ 内裏より百官

の座と教りしりて百教といふこと

ひるひハるよるなり交し書形り

らまはるひのやんを 又夜の母を

しるはるひのやんハるはやん

らとら

おとさうしき せんはるしき

くさしきしきしきしきしき

まはるひのやんハるしき

せしきしき

じまはるひのやんハるしき

ひるひのやんハるしき

まはるひのやんハるしき

あしきしき

うらまはるひのやんハるしき

ひるひのやんハるしき

あしき

しきしきしき 命のしき

あしきしきしきしきしき

母のしきしきしきしき

人のしきしきしき

あしきしきしきしきしき

か乃事いんめいしにんていしん

あつてもちいぬりいぬり

人々く 人のあつて人肉をりぬる

ひのまくのぬりぬり

あつてもちいぬり

すむ乃あつてぬりぬり

ていしんもすむぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

すむ乃あつてぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

伊とくひのあつてもちいぬりぬり 果腹の人

とく男あつてぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

りぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬりぬりぬりぬり

ぬりぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

あつてもちいぬりぬり

物名のうりなり のうしんくは白  
ゆんもぬんもくまはらぬま子  
りりくのみゆる見かしては命ぬ  
小射まくのしんり

かうあはれとと 髪あひの具なり

あきんり 花 若さのさひやく

の人松やま

ありのぬり の 新羅 ちのこ

さくし の 速 すく

ゆんこのせぬりなりあはれと は

時のゆありらぬまうしんり

はくし 津殿のぬき書りしを  
りこのしんりしんり

津殿んすまやかく 命ぬの

すらぬしんり 前 裁津んり

やうしりしんり 下 前裁

はまはら 津 殿り

長根のれ津繪亭子院の書りぬり

伊 路貫之 伊 路集

長根のれ津繪屏風亭子院

ゆせぬりてあくのまはらぬ

ゆり津門のゆらぬ 伊 路集



冬よりワシとて後おハセの母より秋の海  
しらけり

花  
長根寄此寄紅葉の冬よりわかれとの  
一書ハ市門の風もくつ船もつるや  
伊勢集しのせの冬より喜つる院のれ製  
してあるよよりやと一書ハ玉簾あら  
をうらんやしらハ伊勢のうりり母え  
り寄ハいよい見せのゆんあわてし  
長根寄給とて今世のハめ九この  
おくりし書きつるハ別神撮りりり  
きりー花多し月白まうの院あて宇

冬の市門の御事

ゆらりり あげらまれとくさりりまら  
あまひりりりりりり

あき風を吹けの あらね船あ  
世の母者りりりりりりりりり  
ぬくゆりりりりりりりりりりり  
うらりりりりりりりりりりりり

ふきりりりりりりりりりりりりりりり  
ぬ依あり一はさりりりりりりりりりりりり  
やうたりりりりりりりりりりりりりりりりり  
ろあはれ事りりりりりりりりりりりりりりりり



金銀は細合は此二の物法各まは  
引れてはありしと云振るの世はりの  
けいり命ぬま歩門の使として又此  
母のものとじりし付被るはして歩  
あけのてととめく物法とてまつりぬ  
んりしととたなりし相度の具り六  
玄宗乃使はまゝしく揚妃はあり命  
ぬあささりぬよりしては人の物  
おきりせんうらりのらんりあり  
りしゆぬすしははるなり

あぶらぬりてぬれ 方士く幻術

この名より蓬萊へよりぬれしり  
まぬりしはりてし

繪り書とぬれ 女振寄れ繪り付  
てしつらり

右派の芙蓉未尖れ柳や 芙蓉ぬ

西柳女眉と女振寄りしつらりあり  
派ハ池の名く芙蓉ハ蓮花より未尖ハ  
まの名より河内ちるなり未尖の柳の  
一向と除く女振寄りの風とありて  
しこの名ありのまゝなりと云細あり

まじりしとありしとありしとありしとありし

ハなれりしとて くらり無念の夜

まよとて美せりしやうれりしと

ハなれりしとてありけりしとて

死すべしなりし けしきとて

花をたぬもまらぬ 春の夜

かへり見りしとてしとて

と略しても多のりしとて

とありしとてのりしとて

用しとてやうらふ揚美れと

落柳よとてしとて

ありけりしとてのりしとて

お花りて多のりしとて

しとてのりしとて

りりりりりりりりり

おとけりしとて

在天領作以翼鳥在地領為連と辰の輝枝

あふりしとて

隣有喪春不相星有宿不と辰の荖秋

と礼記りしとて

月をりぬ いろもは猶りしとて

事りしとてのりしとて

到日頭應白月落長安夜中鐘

文彥相親歎

燈とくけけりて

あ 夕殿聖苑思清

も振 秋灯挑盡未能眠

然

右近のけりてこの井中の夢の糸のゆりかへ

ふりりめかりりて

亥一刻左近清承初官人初奏時種子

丑一刻右近清宿申申至卯一刻

内殿之亥一刻

奏又着筒

くらの中へ

あ 夜殿あ 言ふ妻のく

南八大妻一よりり清振同清源殿

東枕礼記曰

寝付東首

畳仰座敷へ清枕二階あり

聖寶銀と女をくれ 有寝蓆草へ 清帳

に角有燈樓燈とて永火とけく

乞ハ神聖清女のけり清帳の南より

畳と敷て女席の座とん

あらくてくくくくくくくくくくくくくくく

まひり申へくくくくくくくくくくくくく

あ 玉簾あはせくくくくくくくくくくくく

月くくくくくくくくくくくくくくく

高懸後世君王不子胡

花 春宵苦短く長恨を以書玉簾あ

くくくくくくくくくくくくくくく

揚妻妃と養子姫のけの申よりとの  
相室の侍門ちよ衣よとりまゆり  
て法敷のあまりに新拂の政とせら  
どて姫よやうりまて番主なる朝  
事ハおのりりまてれあま  
りまはよとちりりまてありけり  
朝政ハ清涼殿中く毎朝の御り  
あまのまい。朝餉百二間有りお世前朝  
夕供之南平敷就投。東山よ之  
縮屏風利法殿言副侍子法屏風  
内外案法調度

守りまかり少とせ給て  
依式に述くむとせまふり

大床子此法也。大床子此法膳上右朝夕  
侍より近代ハ一度有り昔ハと着法  
ふく食法之近代不然に波と有りて  
法著とまの陪膳其法著と又之  
此著としてわて。法お法之付ハ中房  
鳴扇之言其時陪膳人撤之陪膳  
人以下位侍長役送位女位六位  
随假有陪膳番陪膳より上首を役  
送常より上右ハる陪膳之とて

又女房陪膳有り 見寛平

<sup>和</sup>ぬいやりしとりのぬとまて其上とては

膳とてまひのり

日乃御膳と早き禁秘持ひくつ

月とさりのち床子のよのハまきとぞく

きりりのけつるある御膳りま

所存のりまのぬり

ろろろ <sup>ら</sup>勢 <sup>ユウラ</sup>多も

此御膳りし少き事とて 余のり

西路りりし御膳り

ぬいりき 断りぬ言通有り

退りたり不さ終りありて退りあり

人の御膳りぬめりまて引出くさのぬ

歎けり 揚妻姑とてのら玄宗信公

よりぬりし事ありとてやわたりま

りんとりけさけり <sup>サ</sup>言 <sup>百葉</sup>

<sup>サ</sup>和 <sup>久集</sup>論

ゆいりり <sup>サ</sup>言 <sup>百葉</sup>

室とてハ履表の心あり

坊とてゆりぬり 赤在院御事なり

此御膳りて坊とてぬりありけつり辞し

とて先坊とてぬり御事なり

と糸舟見所のしつらゆく見たり  
此の御殿も見ゆるはい何  
と群しゆるは延喜白土子 文彦  
早世しきい地とりの先師り  
此とくまも又ふ一条院 三条院 八喜文  
と群して白土子見たり此物  
此以後の事なりとてその  
例ありとにせ

まげれく 兼諾 イナヒナリ ケチハルヨム

つらりありなれど 光看八家愛ふ  
てまの御殿とて願儀よまむせり

まの事跡結依り

世人 み 世の人との文字とてして債や  
又世人とてりもまじき

歩むる ことの事なり 祖母 うば

見こ 親とてりなり

歩むるの た 歩書始は歩は者経致 長宗は

貞観政要と見ゆるは此云債云歩

は者経序 み 尚後云此許 ま 次尚

後債み字め先白土子親とての書始

みいさつ 誓事あり

こころ 利根りなり 曉 サトヒ 見影書



死にて行はる

まじしぬあつらふ

りししの侍をと

侍をと

二回と

書の中の事ハ

まのあらは

之人必下る見者を左に見え不可

並對斗を保つ朕に失は之を慎み之

實平の侍誠必下る見者をこと書

此の字はらの字をてはりま

うのけの事をりてはりせてハ

ののれはあらまりるにはりり

うららん 儀令の去蕃寮と別

小は師をたらふのつまとりてハ僧

蕃の容をり信尼と云はる首百餘

四り来朝せしやしる蕃客をてハ

うの此寮ひつるもれり又鴨臙の臙ハ

臙の前と曰臙鴨の時をと也とハ

りぬ鴨臙ハ後と傳りと云ハりり

異四人来朝の時ハ通事と云可あり

てハ四の心をと傳りぬり

うらららんハ七條朱雀ハあり

右方辨の子乃やうい しのの押さるり

ういけつ又ハ右方弁として改訂を痛し

きりもれりういりしりしりさるんよえき

作うりしきさるりあり

弁て けいしてしちりり将字

帝もれりしりし信しゆりゆりゆりゆり

人の 光君也位りりつるもあつるもよ

右方位の方巾の巾服ハ一歩みゆり

ませハるり改世のこもせもより

と今もせらるりゆりゆりあんとハり

むいやげのこめしりてまトとんらん

言としてんハ又其さるりあり

むいやげのゆりゆりハ改訂白れきよ

痛傷しとまらりりり源氏看ハ換よ

そりそえ換りりハゆりやげのゆり

りハ其相違とて又其相違とてし

あるむのゆりゆりめしりゆりゆり

ても又りりし事をもししり

頃磨のゆりゆりのゆりゆり又云海鏡

とち子誕生時ゆりゆり人をも相と

信是相似

うへ せり せりすじ 一様

いふきとりの地とせ 梅のえのまをい

世ののさるるなり

やまのりく 友原仲直の光孝天

白と柳とてまひり 廣平の高明

とりのせりハみなち和相なり

五品親王の字とくのせりいしてハ

はり 親王ハ一ありて果也

ハ有品なりハありあきなりハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

光孝代いまハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

家世をさるのたれと せのりさ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

いふからくのハハハハハハハハハハ

天下とあはくハハハハハハハハハハ

あはくハハハハハハハハハハハハハハ

わす燭衣のきく人あまふふ道とて

行り

見よし成物あらせのまゝみ世いおく

位りのまことありゆのくさり跡

りり

とくちり 宿曜ハ廿八宿九曜の形を

として人の運命と勘られり

源氏小引りせまふを

<sup>花</sup> 儀滋王弘仁五年ハ男女とて亦

人ハ源朝臣の姓とせし是源氏の始

り醍醐の御子高明親王ハ元服

源氏姓と給ふ系院甚例

先帝のたま 此先帝相在平門の所

親親とは見く給ふぬ

三代世のまは之 光孝 宇多 白河

此三代と平引りしは統あるともぬ

久つくきかちまうられ

行らる人 さらぬ人としり

ゆせよの無勢との流子 けさの

くのたまあり

あつ下 飛香舎あり

あぬるの ぬるたりぬ

お梅のくまへと父くまへとあつてもよ  
りくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

五世 母

いとこを余情あり氣けりあり

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつても

くまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

くまへとあつてもくまへとあつても

少似まじりし事ありて源氏と清  
じほいあるんせけぬとまりま  
ハ多れなりなり軽字ありあけりぬ  
多似まじりしけりさハ多似まじり  
弟てつげぬまじり用しをぬ  
名たつ中なる宮の 弘徽殿の御服也  
母まじりし御事と  
かやると見らま 一條院御付上東門  
院の御入内ありて友壺よまし  
しとほくあつりて世人の  
高代の事とまりきりなり

おふりひ書なる事と

十二かく御衣服 人生十二と一周と

はせり冠礼す和漢の例

升ら 三居り

南殿 弘徽殿

西のや

くはるま 内蔵寮金銀珠玉錦

綾と目丸御服とを御すり

くはる院 穀倉院諸國の米と納し

おらま殿の東の御り東向り

まてくりんの御座引入のち辰の御座

侍前よりあり

清涼殿東廊より下略く

元 西宮折一世源氏元服 侍装束日親より依  
但源氏座並次座西

西山上前並園座其下 引入着座 源氏着  
置程餐具入御共

座為人並程餐具程餐被る着次

座 入内子  
但假前 引入着座 引入退冠者下  
後下侍  
改着

黄 袷 入自仙  
花門 引入祿 ぬき

元白 侍子  
源氏假位上玉御竹祿 侍子 三脚以下假有御進盃酒

本家分ち七  
其真諸陣 今案親王元服の付八畫

座より撤して方座子二脚と云て出侍

あり源氏元服は八殿上の侍侍子

より引くより今更ふ朝拜す此時

ハ六位若人三人殿上の侍侍子と云

て是より引く事あり西宮折より天

皇 侍子  
侍子 侍の侍子ひとあり殿上の

侍侍子より引くよりと云く侍侍子

如彼の心は相遠りたりや 此のハ

まとの侍よりけりおたり

今んさらんまやと云え服する

人と云引入のち長ハ加冠の人より

足はく 端角を冠つてこらんつて

と云

右花つ蔵人にふまひり 花 請託ありと

とくも下のいさよりきうりりれ

くしとくりくあまハ狸後の人々

りくもかこたりちくくも右花つ蔵人

ハ花人の右花つくくひなり

くくゆりきぬいてゆやすも而よまうた

まいてゆろうとまうりて

花 ゆやす凡而ハ冠者の休而之康保二

年八月ゆ記云下侍、赤方一間又施

之屏風其中敷士鋪二牧苜二牧用

中 為親と摸衣而

今案二世源氏之服と下侍と

て休而との西又折は凡くちり又

ゆろうとまうりては之服の凡

扱衣束はくくものけくとまうり堂

絆のけく赤父關腰の袍とまうり

彫し堂いとあり元服の後は

源氏君ハ右位の人なり元服の令云

右位ハ黄袍西文記も首衣はく

あり元服の後ハ縫腰の首袍とま

て右位を長縫殿寮改り

右位を漆黄なり元衣りりて長和



二年三月廿三日 初成歸記云新冠冠

之著首黄衣 其法黄衣世稱之黄衣 控記之意ハ

縫殿式の法黄衣と縁の糸と會標

とく世稱之黄衣と云ふこと云々乃云々

ゆりしうありしよりこれより云々親まは

服或縁の袍と用時あり縫殿式の法

黄衣二の心ありりき黄衣と云ふ時

ハ令之の黄衣とお違りり云々ありあは

此法もあは縁の糸と云ふは控記の心

りり而論はわらハ云々りつ下の法門

と延壽の帝しり云々ハ長和

以前の事なり西家抄一世法衣之服

の而しき黄衣とあり云々黄袍と

説と云用なり

今ま法中しぬる 法衣とて云服衣

法衣ホ喜まはは事なりたりと見

とてありて云々あまわらゆひ法門

そこの法云々の云々なりし親を

以下之服の付ぬ衆もなり情法殿

の事なると云々前へしてあり云

云々の法云服 而殿法なり云々

云々上云々して法拜衆あり 一解

まのしほなるれはあはげやうりやと

たのひやうりとはききかへくこのしほ人  
のこころゆりして見たたうりすとて

キレ雅 マサシ 何あ

春まよりと流るるきあるは

俳のちていせうり見くまうり

流けしきあまも船始

流れそくどうあまうり

りあると まんめるとして

とゆふひよまてあひて 侍ハあま

こまうりしてあま人と見えま

まうりりまあり又侍長とて

りり流氏え服のけうと侍前の流

侍みりつとあまひて 流遊盃酒

りりありや西文物よ見くまうりの

冠者ハ親まは座の次よあすのこ

ゆふりるの 流と書よりとておぬ

しむり

中しあしれをまぬりあま

けしきと見まま申ハびふた

りるりゆりておのけあし

こまうり流氏のおさけくやうり

しげらひひてゆやのぬきぬき

内侍せんしげらひひてゆやのぬきぬき  
たまのしげらひ

花 世下のしげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

しげらひひてゆやのぬきぬき

花 白大襟小女房のぬきぬき

のぬきぬき

あしらのぬき

あしらのぬき

あしらのぬき

あしらのぬき

あしらのぬき

あしらのぬき

草子の回し着の物

ふしきの子

是ハ女の宿装束とて唐衣と云を  
ウラ付表名のふは唐衣の代は着の  
ふし短ゆり一巾入内折しゆめ  
いは東<sup>四尾</sup>止た封 實照<sup>三</sup>の書被羽尋一  
余前指改 並長<sup>三</sup>殿の令勅付物<sup>一</sup>之  
章寫之也とて又未摘をいほり  
見あふふし  
きぬハ女のふは短ゆり又ハ惣着り  
男と装束の下は着ゆあり

いしきぬハ女乃晴のせ乃との衣なり  
いしきハ女のふは短ゆり

いしきりさ<sup>三</sup>のゆり  
沓門の<sup>三</sup>のふは短ゆり  
服の沓女と流代表れ沓のふは  
えぬ<sup>三</sup>の下の何し沓のふは  
中<sup>三</sup>のふは短ゆり  
いしきりさ<sup>三</sup>のゆり  
ゆのせ<sup>三</sup>のゆり

いしきの<sup>三</sup>のふは短ゆり  
せ<sup>三</sup>のふは短ゆり

とてしりり多しあせぬは御末  
のちさりそりしりしりあり

と程しりりしてあきまきまき 有り程

と又ハ侍殿より直殿へより席へ

ち内の時はいりてきさりりして来庭

りゆりて道あり引入ち長きとてい階

よりりて侍前のとありとの中にて

前へいりて奉踏しゆしとの世

と程の局よりち其長程とてハなり

奉踏ハ拜する言侍録とておし

たの目の侍る苑人而此鷹とて

たの目此侍馬はたる寮侍る之苑人

而の鷹とてハ鷹飼ハ苑人而の鷹掌

也書随才ハりぬ人ハ侍鷹飼ハ初

其者ハ出羽陸奥同ハ鷹馬と貞也

也蔵人而より奏すハ但親と源氏ゆえ

服よる鷹と引出物すハ事ハ親の家

也ハ其例あり禁中此依してハあり

らと也ハいさくも面乳有申ハ薩下

也書く書はらハい物徳の作格なり

也飼ぬ苑人而ハ鷹掌也引入 今葉野の葉

也長ハ鷹と録ハ其例ハ也 鷹飼ハ侍衣ハ留子

と着ふ月大御食此日ハ隨身鷹飼此装  
未と着ん錦留子括條狩鏝鷹狩月  
と之扱よ付くる雄と扱く野とりとく  
らひとらうと表すりうりとの扱後乃  
こくハ加冠の祿の鷹と五人是とと  
一又いやらむ装束と着らふとや  
い事たりぬる西月兵一但鷹飼の  
多ありあらされハ野装束と云ふと下  
りある蔵人而の赤鷹飼は多  
帯の装束はく有と尋ひて引入  
大臣の随方いほへふや此ハゆけと

り一鞭と云ふや

蔵人而ハ持手表伝回扱扱長衣ハと  
あり殿上の次のより一布障子と隔て  
蔵人而よりより地下仕者の仕前より

赤松此ハ赤子とらんらんめはく扱て

祿と云ふ 源氏若此ハ服ハ祿と云ふハ

まき又赤え服の扱の依と表すり云

其扱ハ扱つこくを扱ふ云

其日此扱前乃中りハ物と云ふ

花 缺物ハ惣若り云服の人なり扱其

中し帯也よ入らむハこ扱より又扱扱

小盛より之あり親王<sup>も</sup>之服の付ハ缺物  
あり<sup>も</sup>以下是とありて<sup>も</sup>庭中し列之  
す<sup>も</sup>付方一の古長一人<sup>も</sup>度し<sup>も</sup>まりて<sup>も</sup>  
小<sup>も</sup>の物<sup>も</sup>し<sup>も</sup>あ<sup>も</sup>の<sup>も</sup>上<sup>も</sup>首<sup>も</sup>の人<sup>も</sup>奏  
<sup>も</sup>某<sup>も</sup>の<sup>も</sup>ち<sup>も</sup>り<sup>も</sup>沙<sup>も</sup>契<sup>も</sup>と<sup>も</sup>りて<sup>も</sup>各<sup>も</sup>物<sup>も</sup>の<sup>も</sup>名  
と<sup>も</sup>奏<sup>も</sup>と<sup>も</sup>其<sup>も</sup>付<sup>も</sup>古<sup>も</sup>長<sup>も</sup>伴<sup>も</sup>を<sup>も</sup>り<sup>も</sup>て<sup>も</sup>小  
<sup>も</sup>之<sup>も</sup>列<sup>も</sup>膳<sup>も</sup>内<sup>も</sup>膳<sup>も</sup>司<sup>も</sup>未<sup>も</sup>と<sup>も</sup>見<sup>も</sup>出<sup>も</sup>て<sup>も</sup>後  
<sup>も</sup>元<sup>も</sup>より<sup>も</sup>一<sup>も</sup>世<sup>も</sup>の<sup>も</sup>源<sup>も</sup>氏<sup>も</sup>の<sup>も</sup>之<sup>も</sup>服<sup>も</sup>は<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>缺<sup>も</sup>物<sup>も</sup>な  
<sup>も</sup>き<sup>も</sup>し<sup>も</sup>や<sup>も</sup>但<sup>も</sup>い<sup>も</sup>功<sup>も</sup>位<sup>も</sup>の<sup>も</sup>何<sup>も</sup>し<sup>も</sup>限<sup>も</sup>を<sup>も</sup>申<sup>も</sup>り  
<sup>も</sup>し<sup>も</sup>と<sup>も</sup>く<sup>も</sup>く<sup>も</sup>を<sup>も</sup>世<sup>も</sup>傳<sup>も</sup>し<sup>も</sup>思<sup>も</sup>く<sup>も</sup>と<sup>も</sup>是<sup>も</sup>親<sup>も</sup>王  
の<sup>も</sup>付<sup>も</sup>代<sup>も</sup>例<sup>も</sup>より<sup>も</sup>て<sup>も</sup>缺<sup>も</sup>物<sup>も</sup>を<sup>も</sup>右<sup>も</sup>方<sup>も</sup>弁<sup>も</sup>け

おりにて用ゑせらるや

こものハこじ物とむじや

うきろくのまひり

も念<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>之<sup>も</sup>服<sup>も</sup>の<sup>も</sup>人<sup>も</sup>の<sup>も</sup>女<sup>も</sup>家<sup>も</sup>より<sup>も</sup>諸<sup>も</sup>陣<sup>も</sup>の  
役<sup>も</sup>者<sup>も</sup>し<sup>も</sup>是<sup>も</sup>と<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>ら<sup>も</sup>好<sup>も</sup>物<sup>も</sup>と<sup>も</sup>申<sup>も</sup>ま<sup>も</sup>抄<sup>も</sup>し<sup>も</sup>ろ<sup>も</sup>の  
る<sup>も</sup>細<sup>も</sup>片<sup>も</sup>と<sup>も</sup>き<sup>も</sup>り<sup>も</sup>親<sup>も</sup>も<sup>も</sup>之<sup>も</sup>服<sup>も</sup>の<sup>も</sup>付<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>諸<sup>も</sup>官<sup>も</sup>  
の<sup>も</sup>長<sup>も</sup>官<sup>も</sup>と<sup>も</sup>り<sup>も</sup>人<sup>も</sup>各<sup>も</sup>下<sup>も</sup>知<sup>も</sup>し<sup>も</sup>し<sup>も</sup>調<sup>も</sup>せ<sup>も</sup>し<sup>も</sup>  
是<sup>も</sup>源<sup>も</sup>氏<sup>も</sup>の<sup>も</sup>之<sup>も</sup>服<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>り<sup>も</sup>何<sup>も</sup>し<sup>も</sup>祿<sup>も</sup>の<sup>も</sup>と<sup>も</sup>り<sup>も</sup>  
付<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>親<sup>も</sup>と<sup>も</sup>こ<sup>も</sup>下<sup>も</sup>の<sup>も</sup>之<sup>も</sup>服<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>是<sup>も</sup>と<sup>も</sup>り<sup>も</sup>て<sup>も</sup>と  
善<sup>も</sup>文<sup>も</sup>の<sup>も</sup>之<sup>も</sup>之<sup>も</sup>服<sup>も</sup>の<sup>も</sup>付<sup>も</sup>の<sup>も</sup>申<sup>も</sup>こ<sup>も</sup>り<sup>も</sup>て<sup>も</sup>下<sup>も</sup>の  
と<sup>も</sup>り<sup>も</sup>て<sup>も</sup>善<sup>も</sup>文<sup>も</sup>の<sup>も</sup>之<sup>も</sup>之<sup>も</sup>服<sup>も</sup>ハ<sup>も</sup>と<sup>も</sup>り<sup>も</sup>て<sup>も</sup>下<sup>も</sup>の

ていふやうなありけつうのものをゆり

れ  
うきハほく見飯しつものこ

とくせさく 西もりこまてとちふあり

女表ハすうしうしうさうりり

菱のく十六歳あり

は行々 左長開白りりて

とくま田のひしりぬらうしりん

菱とのしゆ母ハ相壘し門のハ一暖あり

唯道云ハ醍醐のしゆらうかろく是よ唯れ

行々ぬりてしつさたろハ ための行々

り中々ぬちち長もたねとつさぬと

はまりこりりのしゆひとくしりて

まの寝てハち方ゆしりてすくを

てすまよ中ひのまきりまらのりつ

ひりりて

ゆりひよりりぬひて後ハ 源氏君十

二より十歳までの事ハげらやま

述しは二服のしものらうしりりて

ゆりて

ゆりなく ちりしうしうあり

しりりハしりりありすまひ

ゆりりし 詩書目し



軍のよはは 法皇院ハ三条宮格あり大入

道

山堂  
山親し

仰而してもと法皇院と号

廿二正暦二年法皇院と名とこれ

ちりりり源氏の法皇の二名院ハ三

りひふひまきや 文政の母乃軍令ぬ

とけとてされあり

修理職内通つる 修造作事そのの

織り法の上下いありきぬあしと

内也寮ハ物作事とつるいあり

おらる 三二と書りていなりてん

あややううん人と 二のふありとちる

あややううん人と 早く又ハ後下

の作事とつるいひてのいあり

りひふひまきや 文政初う初まり

あ書先よぬものいりててい物作

作者の得んくの今得ぬ也の得又あひ

の地あり能ふ別すし



